

[書評論文]

今井邦彦『言語理論としての語用論—入門から総論まで』

東京：開拓社，2015. Pp. xi + 194. ISBN978-4-7589-2550-1

西川 眞由美

摂南大学

語用論は、1960年代に哲学者のオースティン (Austin) やサール (Searle)、グライス (Grice) によって実質的な基盤が築かれた。その後、1980年代初頭から、人類学者のスーパーバー (Sperber) と哲学者ウィルソン (Wilson) によって提唱された関連性理論 (Relevance Theory、以後 RT と称す) は、チョムスキー (Chomsky) の生成文法と語用論の基礎を築いたグライスの理論を基に誕生し、その言語観を継承しながら発展してきた。文の意味理解において意味論の限界が示される中、語用論が使用文脈における文の意味の解釈に必要不可欠であることは誰もが認めるところであり、その研究領域はどんどん広がりを見せている。一方で、語用論研究の方法論として RT が広く受け入れられているとは言い難い。その理由は、おそらく理論自体に内在する難解さにあると考えられる。RT が提示する様々な道具立ては非常に説得力があり、多様な言語表現の解釈の分析に有効であると感じられる一方で、いざ RT の理論を完全に理解しようとなるとかなりの困難が予想される。まず、何といたっても理論のよりどころとなるのは Wilson and Sperber (1986/1995) “*Relevance Theory—Cognition and Communication*” である。RT のバイブルともいえるこの本には、RT の基本となるコンセプトが詳細に書かれている。しかし、具体的な語用論現象の研究手法についてはほとんど記述されておらず、実際にそれを学ぶには、RT を使って考察を試みた他の研究論文を読みながらその理解を深めなければならない。Blakemore (1992) “*Understanding Utterances*” も出版され、RT の枠組みでどのような言語表現がどのように扱えるのか少しイメージがつかめるようになり、その後日本でも『語用論への招待』(今井邦彦 2001) や『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション』(東森勲・吉村あき子 2003) が出版された。しかしながら、具体例の解説が多少増えたものの、やはり冒頭には膨大な理論の背景説明があり、大方の語用論研究の初心者にとっては難解であることには変わりない。RT が多くの研究者に受け入れられない、あるいは完全な理解を妨げる主たる要因は何といたってもその背景にある深遠かつ広大な言語観と世界観を理解することの困難さにあり、その理解なくしては具体的な言語表現の分析に

RTの理論やRT独自の метод論を適切かつ効果的に使えないところにあると思われる。他の科学理論同様、RTもまた精緻な理論的裏付けと、理論を支える多様な道具立て、それを表す多くの独自の用語とその定義をすべて頭に入れて初めて正しく使える理論なのである。他にも優れた語用理論が存在する中で、なぜ苦勞してRTを使う必要があるのか、と考える人も少なくないだろう。

著者は、あらゆる言語理論に精通し、日本におけるRTの発展に最も尽力した研究者の1人である。本書には、RTの基本的な説明の後に、RTが他の語用論とどのように異なるのが簡潔かつ正確に記述されている。興味深いのは、第1章のRTの概説の構成が従来と大きく異なることである。これまでのRTの研究書では、意図明示的刺激 (ostensive stimulus)、認知環境 (cognitive environment)、文脈 (context)、(非論証的) 推論 ((non-demonstrative) inference)、関連性の原理 (principles of relevance) などの理論の骨組となる抽象的な概念の説明から始まるのが常であった。本書では、多義語の同定に関わるあいまい性除去 (disambiguation) や、指示語に指示対象を付与する飽和 (saturation) など、明意 (explicature) を復元する典型的な語用論過程 (pragmatic procedures) を具体例を使って説明するところから始まる。¹ このように出だしそのものが初心者にも身近でわかりやすい内容となっており、「ひょっとしたら自分の研究に使えるかもしれない」と思わせるような仕掛けが作られている。しかし、本書の主たる目的は競合する他の語用理論とRTの比較にある。言語行為理論 (Speech Act Theory)、グライス理論、それを継承し発展させた新グライス理論、また認知言語学 (cognitive linguistics) などの基本概念が簡潔に説明され、そのうえでこれらの理論が抱える問題点や扱えない言語事例を挙げつつ、RTでは説明可能であることを示している。そして、多様な語用論現象の説明におけるRTの優位性を証明するとともに、その要因は発話解釈における推論の決め手をモジュールと位置づけたことだとしている。このような比較は、これまでも筆者の著書の中で行われてきたが、あくまでそれはRTの説明力を強化するためのものであった。今回は、比較検討そのものに重点を置くことで各語用理論における差異がさらに顕著になっている。本書のサブタイトルにあるように、これから本格的に語用論を志す研究者には入門書として、ある程度語用理論に精通している研究者にはまさしく語用論の総論として、本書が今後の語用論研究のためにいかに有意義なものであるかを順を追って述べていく。

¹ 今井は著書においてしばしば独自の訳語を使用している。例えば、explicature や implicature は、本書では明意・暗意という訳語が使われているが、RTの著書や論文では表意・推意という訳語があてられることが多い。本書では全て今井の訳語を使用する。

1. 本書の構成と概要

本書の目的は、冒頭に述べられている通り、5つの主要な語用理論（関連性理論、言語行為理論、グライス理論、新グライス派理論、認知言語学）の紹介と各理論の比較にある。RTと他の4つの理論が様々なパースペクティブから比較検討され、語用論の枠組みとしての妥当性・有用性が批判的に議論されている。構成は、大きく関連性理論の概説、言語行為理論・グライス理論・新グライス派理論、認知言語学の3部からなっている。各章および大節の題名とともに、下記に記す。

序論 語用論とはなんだろう

1. 意味論と語用論
2. 意味研究小史

第1章 関連性理論

- 1.1. 真理条件的意味論からの決別
- 1.2. 意味確定度不十分性のテーゼ
- 1.3. 語用論過程
- 1.4. 関連性
- 1.5. モジュール
- 1.6. 語用論過程モジュール性

第2章 言語行為理論・グライス理論・新グライス派

- 2.1. 最初の本格的語用論・言語行為理論
- 2.2. グライス理論
- 2.3. グライス理論をどう評価するか
- 2.4. 新グライス派

第3章 認知言語学

- 3.1. 言語の“独自性”の否定
- 3.2. 言語研究は認知全般との関連において行わなければならぬ
- 3.3. 認知言語学の「成果」
- 3.4. 関連性理論によるモジュール説

序論では、文の意味を扱う2つの言語理論である意味論と語用論の違いを確認する。言葉によって伝えられる「意味」を考えると、語用論と意味論の区別は時に困難を要する。ここでは、意味論では十分に説明できない事例を用いて語用論の必要性が示され、意味論的意味を(1') (p. 4)と、語用論的意味を(2') (ibid.)と定義している。そして、文の解釈においては意味論に符号化された意味という「基」になるものがあるのはじめて具体的に明瞭な意味を得ることができるのだとして、意味論と語用論両方の重要性を確認している。

語用論が言語学に導入されたことにより、言葉が運用から切り離されて持つ「意味」と言葉の運用における「意味」の境目が明確に区別できるようになった。「意味研究小史」では、意味論から語用論が誕生する過程において、哲学者たちが意味の「意味」についての思考に費やした長い道のりが簡潔にまとめられている。

第1章では、RTの基本概念と解釈の方法論が、使用される用語やその定義とともに概説されている。RTでは、意図明示の伝達を解釈する際に聞き手の心内に表示されるレベ

ルとそれを復元する計算方法が具体的に設定され、かつその方法論におけるすべての用語は厳密に定義されており、それこそが認知科学理論である RT の圧倒的な説明力を生み出す源となっている。言語形式の論理形式 (logical form) から必要に応じて4つの語用論過程を経て明意へと発展 (develop) させ、さらに相互並行的に行なわれる推論プロセスにより高次明意 (higher-level explicature) や暗意 (implicature) を復元するという RT の発話解釈の枠組みは、従来の統語論、意味論などの言語理論を基に成立し、完璧な統一性と整合性を作り上げている。

第2章では、言語行為理論、グライス理論、さらにそれを発展させた新グライス派の理論について概説され、それぞれの問題点が議論されている。語用論は、真理条件的意味論では扱えなかった「話し手の意図」という意味の側面に光を当てた言語行為理論と、それを理解する際の「推論 (inference)」の必要性を初めて提唱したグライス理論から本格的に始まったと言える。その後、グライス理論を整理し精緻化することを目指したホーン (Horn) やレヴィンソン (Levinson) によって新グライス派の理論が生まれ、一方でオーステインやサルによって始まった言語行為論はヴァンダーヴェーケン (Vanderveken) らによって改訂が繰り返されてきたことが述べられている。そして、いずれの理論もどんどん複雑になっていったのとは対照的に、人の基本的な認知メカニズムに基づく RT の普遍性が示されている。

第3章では、認知言語学に対する反論が述べられている。同じ人間の認知システムを基に築かれた理論でありながら、RT と認知言語学はその根本となる概念が全く異なる。筆者は、レイコフ (Lakoff) の生成意味論 (generative semantics)、その後が続くラニカー (Langacker) の認知言語学やフォコニエ (Fauconnier) のメンタル・スペース (mental space) 理論を取り上げ、それぞれの問題点を指摘しながら、最終的には「言語の独自性」という視点から、認知言語学の説明力の脆弱さについて議論が展開されている。

2. 関連性理論概要

もし文が使用されるためにあるのならば、その文の意味をその使用者の「意図」と切り離して考えることはできないとし、まず真理条件的意味論 (truth-conditional semantics) からの決別を宣言するところから本書は始まる。つまり、発話のように実際に使用される文によって伝えられる意味の理解には、その背後に存在する話し手の意図を理解することが必要であること、そのためには意味論では不十分であること、それが語用論の必要性へとつながっているのである。

1.2 では、RT が文は伝えたいことを全て明示的に表してはいないという「意味確定度不十分性のテーゼ (semantic underdeterminacy thesis)」に立脚していること、そして RT の利点は発話の言語形式と伝達される意味との間のずれを調整する4つの語用論過程を

具体的に提示していることがまず述べられている。文法モジュールの出力である論理形式を話し手が伝達している意味レベルである明意へと発展させる語用論過程として、まず、あいまいな言語形式の意味を確定する「あいまい性除去」、指示詞の指示対象を特定する「飽和」、語の辞書的意味を狭めたり、広げたり、ずらしたりして、その文脈で話し手が伝えようとした意味に近づける推論過程「アドホック概念構築 (ad hoc concept construction)」を挙げている。これら3つの語用論過程は言語形式に支配された語用論レベル、つまり文法の要請によるものである。特に、アドホック概念構築という語用論的推論によって、従来グライス理論では含意 (what is implicated、あるいは implicature) のレベルで扱われてきたメタファーなどの文彩 (figure of speech) も明意のレベルでの意味解釈が可能になったのである。4つ目の「自由補強 (free enrichment)」は、純粹に解釈そのものの必要性から生まれた推論によって行われる。さらに、暗意や表出命題 (the proposition expressed) を命題態度や言語行為を表す表現に埋め込んだ高次明意もまた、推論によって同定される。

RTでは、伝達される意味を復元するための推論の手掛かりは人が生得的に持っている「関連性 (relevance)」への志向にあるとし、関連性は個人の認知環境を改善する3つの認知効果 (cognitive effect) (p. 54) で定義され、解釈に要する労力 (effort) に見合うだけの認知効果を保証するという「最適の関連性の当然視 (presumption of optimal relevance)」(p. 61) により制約されている。また、実際の発話解釈自体は、(85) (p. 63) で示された解釈手順に沿って開始され終了するとされている。人の認知と伝達に関しては、それぞれ「認知的関連性の原則 (cognitive principle of relevance)」(p. 57) と「伝達的関連性の原則 (communicative principle of relevance)」(p. 62) という2つの原則を設定している。このようにRTでは、関連性の原理、解釈手順、関連性や文脈の定義を示すことによって、人が発話を心内でどのように処理するのかについて明確な方法論を提供しているのである。さらに、RTが適用されるのは、情動的意図 (informative intention) (p. 58) と伝達的意図 (communicative intention) (p. 59) の両方を備えた (発話などの) 意図明示的伝達 (ostensive communication) (p. 60) のみであること、そして意図明示的伝達の解釈は意識的な行動ではなく、それを聞いただけで自動的に遂行される亜人格的 (sub-personal) な行動、つまりモジュールであることを繰り返し述べている。

本章の最後は、RTの語用論過程がモジュールであると位置づける理由と説明で締めくくられている。これは、RTが他の語用理論と決定的に異なる点で、本書を通じて語られる最も重要なポイントである。スーパーバーは、脳の下位レベルの機能 (知覚や言語処理など) はモジュールだが、それを統合・計算し総合的な判断などをつかさどる中枢体系 (central system) はモジュールではないとするフォウダー (Fodor) の理論に対し、100%モジュール説を唱えている。つまり新たにインプットされた情報、様々な記憶や知識から呼び出した文脈想定を瞬時に計算して結論を出すという発話解釈に必要とされる総合的な

推論プロセスもモジュールであり、それは一般的な心の理論のサブモジュールであるという立場を RT は取っている。発話解釈に必要な推論がモジュールの特徴である領域特定性、義務的操作性、操作過程の迅速性、情報遮断性などを持ち合わせていることが、具体例とともに丁寧に説明されており、本来非常に難解な内容でありながら初心者にも理解しやすいものとなっている。

本章では、RT のほとんど全ての重要な概念と方法論が非常にわかりやすく説明されているのは見事である。一方で、語が意味論的に符号化する 2 つの意味、概念的意味 (conceptual meaning) と手続きの意味 (procedural meaning) についての記述があれば、なお RT の理論としての充実度を証明できたのではないかと考える。これは、Blakemore (1987) 以降の研究で展開されてきた RT 独自の意味論で、概念的意味は概念的表示を構成するもので、それをどのように操作するかについての情報は手続きの意味とされる (Wilson and Sperber 1993: 2 参照)。ほとんどの内容語は概念的意味を符号化しており、一方で代名詞などは典型的な手続きの意味を符号化する例である。他にも談話連結詞 (discourse connective、あるいは discourse marker) や発話内効力指示詞 (illocutionary force indicator) などがある。次例を見てみる。

- (1) a. It's raining.
 b. So the grass is wet. (Wilson and Sperber 1993: 14)
- (2) Peter's a genius, huh! (Wilson and Sperber 1993: 22)
- (3) Mary doesn't think that Peter's a genius. (ibid.)

(1) の (b) で伝達される命題内容「芝生は湿っている」は (a) で伝達される「雨が降っている」の暗意された結論となり、ゆえに談話連結詞 so は発話の暗意に制約を課す手続きの意味を符号化している。メアリーが (2) を発話したとすると、それは (3) の「メアリーはピーターが天才だとは思っていない」という内容を伝達していると解釈され、その時 huh という態度標識は (3) のような高次明意に制約を課す手続きを符号化している。意味論的に符号化される意味に概念的意味と手続きの意味という 2 つの意味区分を設けることにより、語が発話や文の中でどのような形で関連性を持つのかを説明することがよりやりやすくなったと言える。また、「ジェスチャーや身振り、笑顔や声の調子といった非言語的な意図明示的行為と発話解釈との相互作用の説明にも資する」(武内 2015: 50-51) とされ、従来扱いが困難だった様々な言語現象を説明する可能性の道をも開いたのである。

3. 言語行為理論、グライス理論、新グライス派

第 2 章では、語用論の基礎と言われる 2 つの大きな理論とそれらをさらに発展させた

理論について概説しながら、RTと比較しつつ、各理論が抱える問題点について述べられている。

まず、オックスフォード大学の哲学者で「日常言語学派 (Ordinary Language School)」の中心人物であったオースティンによって生み出され、その後サールやヴァンダーヴェーケンに引き継がれた言語行為理論について、その概要が述べられている。この理論は、文の真理条件 (truth condition) ではなく、言語行為を可能にする適切性の条件 (felicity conditions) を重視した。しかし、言語行為の種類や数が研究者によって異なること、行為どうしの区別がわかりにくかったり、1つの言語表現が2つ以上の行為を遂行したりする例があったり、結局言語行為と呼ばれるものが実際いくつ存在するのかがあいまいである。また、その行為が成立する条件を正確に予測することは不可能だということから、そのような理論は科学的とは言えないとしている。

次にオックスフォード大学の哲学者グライスの理論について、発話解釈における話し手の意味 (speaker meaning) とそれを解釈する際の聞き手の推論の重要性を最初に唱えたことを高く評価するとともに、様々な問題点を指摘している。グライス理論の根底をなすのは協調の原理 (Cooperative Principle) (p. 85) とそれを支える量・質・関係・様態に関する4つの格率 (maxims) (pp. 86-87) である。伝達される意味のレベルは、「言われたこと (what is said)」と「含意されたこと (あるいは含意) (what is implicated)」の2つが設定されており (p. 89)、「言われたこと」はあいまい性除去や指示対象付与 (reference assignment) などの語用論過程を経て得られるが、その他の意味は全て4つの格率に基づいた推論によって行われる含意である。RTでは、推論を暗意の復元だけでなく明意の復元にも使用するのに対し、グライス理論では推論は含意を理解することだけに使われる。さらに、協調の原理は常に遵守される一方で4つの格率は時に遵守されなかったり、格率どうしが対立したり、さらにあからさまに違反される (flouting) こともあり、いわゆるメタファーやアイロニーなどの文彩はこのような格率違反という形で説明されているのである。

グライス理論への反論は、推論の手立てとなる基本概念を社会規範に求めたことから始められる。4つの格率が守られたり、守られなかったりするのとはなぜか。そもそも、このような原理や格率が実際に存在するのかということも含め、理論自体の欠陥として指摘している。2つ目は、グライス理論では説明できない発話例があるということである。例えば、快晴の日にピクニックに出かけたら、突然大雨になったような状況を考える (pp. 93-94)。(4) (本書では (26) (p. 94)) のアイロニーの例は、グライスの質の格率違反で説明できるが、どの格率にも違反しない (5) (本書では (27) (p. 94)) のようなアイロニーの例がグライス理論では説明できないのである。

(4) What a lovely day for a picnic!

(5) Did you remember to water the flowers?

3つ目は、会話の含意を導出する際グライス理論では「文字通りの意味は捨て去られる」とされていることへの疑問である。

(6) A: マゼラティは洒落た車です。どうです1台?

B: 私は高価な車は買わないんです。

(6) (本書では (28) (p. 95)) では、B の発話意図はもちろん「マゼラティは買わない」という含意にあるが、「話し手が高価な車を買わない」という「言われたこと」もやはり伝達されている。つまり、含意を伝達すると同時に文字通りの意味も伝達されている例があることをグライス理論では説明できないのである。最後に、格率自体の定義のあいまいさ (特に関係の格率の「関連することを言え」という文言において、「関連性」とはどのようなものが明確ではない) が残ること、格率を守らなくても成立する会話は数多くあることを示し、格率自体が根本的に持つ問題点も指摘している。(7) (本書では (25) (p. 93)) を見てみる。

(7) Paul: Where does Bob live?

Lena: Somewhere in the south of France.

この例で、リーナが伝達していると考えられる「ボブの居場所を正確には知らない」という含意は、グライス理論では質の格率を守ることによって量の格率を犯した例として説明されている (p. 99 では様態の格率に違反した例としてもあげられている)。しかし、リーナは「そのことについて話したくない」ということを伝えようとしたのかもしれない。グライスの理論ではこのことが説明できなかったのである。しかし、RT の「最適の関連性の当然視 (p. 100)」で示される2つの規定「意図明示的刺激は、受け手がそれをプロセスする努力を払うに値するだけの関連性を持っていること」「意図明示的刺激は、送り手の能力と選択が許す範囲内で最も高い関連性を持つ」により、リーナが、「ボブの居場所をよく知らない」(能力)と「知っているが言いたくない」(選択)という両方の解釈の可能性が示され、RT の理論としての完成度の高さを見事に証明している。つまり、RT では社会的な規範や格率に訴えなくても人が本来備えている関連性の原則によって全て解釈可能だとし、最終的にグライスの基本的な間違いは発話解釈における語用論過程を無意識に働くモジュールとみなさなかったことだと締めくくられている。

グライスへの反論は、グライスサークル (Grice's circle) という循環理論への言及があれば、さらにはっきりと示せたのではないかと考える。² グライス理論においては、発話

² グライスサークルについては、Carston (2002: 148-149) 参照。

を解釈する際「言われたこと」が先に決定され、それから含意が決まる。しかしながら、and 連言や some などの尺度語が含まれた発話例においては、含意を決定してから「言われたこと」が決まることになり、「言われたこと」が含意に依存せざるを得なくなるという矛盾が起こる。つまり、言われたことは含意を決定するが、含意によっても決定されるのである。これこそが、推論過程を「言われたこと」にも設定しなかったことに起因する欠陥だと言えるのである。

次に、新グライス派と呼ばれるホーンとレヴィンソンの理論を挙げている。ともにグライスの理論を継承しつつグライスの格率の精緻化を図り、ホーンは P-Principle と R-Principle の2つの原理を、レヴィンソンは Q-Principle, I-Principle, M-Principle の3つの原理を立てている。ホーンに関しては、「いくつか (some)」は「すべてではない (not all)」を含意することで代表される尺度含意 (scalar implicature)、Q 尺度 (Q-scale) (pp. 104-105) について説明している。そして、そもそも尺度という概念が個々の話し手の認知環境に常に存在するかどうかに疑問を呈すると同時に、「いくつか」は「すべてではない」を含意するというホーンの理論は、「いくつかあるが全部かもしれない」「いくつかあるが、全部かどうかは言及の範囲にはない」という some を使用した場合に出てくる他の解釈の可能性を説明できないとして、その欠陥を指摘している。一方で、RT による自由補強という語用論過程は全て関連性の原則というモジュールによって行われるので、使用文脈から呼び出し可能な想定次第ですべての解釈が可能になり、それは明意として復元できるのである。

レヴィンソンの理論については、Q-Principle, I-Principle, M-Principle という3つの発見模索法 (heuristics) (pp. 117-120) についてわかりやすく概説されている。ここでもいくつかの批判的な意見が述べられる。1つ目は、迅速に行われなければならない発話解釈において、3つの発見模索法のような複雑な推論過程が実際心内で起こっているかどうかということである。さらに、ホーン同様レヴィンソンも「一般的会話の含意 (generalized conversational implicature; GCI)」という独立した含意のレベルの存在を認めていることについても批判的である。つまり、それぞれ全く異なる認知環境を持っているはずの聞き手が様々な文脈で発話解釈を行う時、プロトタイプ理論のようにデフォルト (default) 的に受け取られる意味を前提にすること自体が理論的な欠陥であるというのである。さらに、「言われたことが決定された後に、初めて GCI と PCI が生ずる」という復元の順序を設定していることにも否定的である。³ RT では、暗意にこのような区別は設けて

³ グライス理論では、会話によって含意される意味に2つのレベル、特定のコンテキストの影響を受けない含意である GCI (generalized conversational implicature) と特定のコンテキストから導出される含意である PCI (particularized conversational implicature) を規定している。後者が RT の暗意に近いとされている。

いない。また、発話の論理形式、表出命題、明意、暗意の復元過程は「相互並行調節 (mutual parallel adjustment)」で行われ、実際に一般的な暗意やメタファーの例でも先に暗意が復元され、その後で明意が復元される例もあり、それは実験でも証明されているのである。

レヴィンソンについては、Brown & Levinson (1987) で一世を風靡したポライトネス (politeness) 原理 (p. 127) についても反論を展開している。彼らの理論では、人はフェイス (face) を持っており、言語使用におけるポライトネスというのはそれを保つためにあるというのである。フェイスには、人に認められたいというポジティブ・フェイス (positive face) と人に邪魔されたくないというネガティブ・フェイス (negative face) があり、申し出の断りや依頼のような行為は相手に対するフェイスを脅かす行為、つまりフェイス威嚇行為 (face-threatening act) (p. 128) と考えられる。そこで、それを回避するために、I'm sorry but ~ のようなヘッジ (hedge) や Can you ~?, Could you ~? のような通常丁寧とされる言語表現が使用されるというのである。本書では、丁寧な言語表現を使用することによってポライトネスというものが伝達されると考えることに疑問を呈し、それを語用論で扱うこと自体が適切ではないとしている (pp. 123-130)。そもそも「ポライトネスが伝達される」と言う時、具体的にどのような想定が伝達されているのかがあいまいである。RT では、話し手がある状況で相手に対して「円滑な人間関係を構築・維持したい」という想定を意図明示的に伝達するのであれば、そうすることによって相手の認知環境を変化させることになり、何らかの「丁寧さ」が伝達されると考えられる。そしてそれは、他の発話解釈と同様、関連性の原理と解釈手続きによって説明可能なのである。⁴

4. 認知言語学

認知言語学は、人の「認知 (cognition)」システムの重要性を理論の中心に据えている点では RT と似ている。一方で、それは、言語能力は認知主体が外部世界との感覚的・身体的な経験によって動機づけられるとし、言語の独自性を否定する立場をとるという点で、RT とは全く異なる言語観を持つ。第3章では、ラニカーの認知言語理論とフォコニエのメンタル・スペース理論を中心に、主に認知言語学の基本概念への反論が展開されている。

まず、認知言語学が言語の自律性を否定している、つまり言語能力という言語のみに特

⁴ RT とポライトネスに関しては、Jary (1998)、松井 (2001) など参照。RT と交感的言語使用については、Žegarac (1998) を参照。

化した心的構造物の存在を認めないという立場をとることに対する批判から始まる。著者は反例として、言語という特定の分野だけに特化した症状、例えば知能が低いにもかかわらず多言語を習得するサヴァンと呼ばれる人たち、特定の言語形式にのみ文法的な間違いが見られる特異性言語障害 (specific language impairment)、ウィリアムズ症候群 (Williams syndrome)、知能が極めて低いのに流暢に言語を操るカクテルパーティ症候群 (cocktail party syndrome) などの例を挙げ、これらは言語に関わる機能が自立していることの証拠であると述べている (pp. 142-146)。さらに、意味を特に重視する認知言語学では、意味はでたためだが言語形式を正しく生産できる症状を持つ人たちがいるという事実を説明できないことを指摘している。

次に、フォコニエのメンタルスペース理論について概説し (pp. 148-149)、①言語理論全体の中で統語論・意味論・語用論との関係が不明確なこと、②語用論現象も研究の射程に含むにもかかわらず認知システムのモジュール性を認めていないこと、③「メンタル・スペース」「役割」「値」という基本概念に関する厳密な定義がないこと、などを問題点として挙げている。

結局、(20) (p. 153) にあるように、認知言語学の基本的方針は「言語研究は認知全般との関連において行わなければならない」であるが、深層に存在する異なる認識的領域から他の領域への写像とされる言語的メタファーにおいては、(27) のような写像できないメタファーの例 (p. 156) が存在することや、写像する認知領域が無いシネクドキー (synecdoche) はどのようにして解釈されるのかについても何ら説明されていないことを例に挙げ、人が持つ無限の認知体系からどのように個々の発話事例の解釈の術を見出すのかについては全く明らかにされていないと批判している。本章では、言語能力をモジュールとみなさないことへの反論が大半を占め、幾分観念的な反論で終わっている感が否めない。認知言語学については、実際個々の発話を解釈する際「文脈」や「解釈候補」がどのように活性化され、最終的な伝達内容をどのように決定するのかについて、さらに具体例を使って RT の解釈過程と比較しつつ細かい議論があればもう少し両者の違いが分かりやすい形で提示できたのではないかと考える。

本章の最後は、人が発話解釈において行使する推論の本質的な形はあれこれと解釈候補を吟味する「思慮行使的推論 (reflective inference)」ではなく、自動的、瞬間的、迅速な「直観的推論 (intuitive inference)」であり、このような能力は人が進化の過程で獲得した形質遺伝子として受け継がれていること、RT はそれを前提にした具体的な解釈過程を明らかにしていること、またその研究結果は心理学、言語発達、進化人類学など他の様々な研究領域での結果とも整合性を持つことが挙げられ、RT の語用理論としての正当性・妥当性を再確認している。

5. おわりに

言語形式や言語表現の研究において、直観的に納得でき、かつ多くの研究者に認められ支持されている理論や枠組みを使うことは、議論に説得性を持たせるうえで大きな効果を持つ。しかし、その方法論をどの理論に求めるかは、それぞれ研究対象とする言語形式や表現が持つ特徴、理論との相性、使いやすさなどに影響されるだろう。語用論に関わる主な理論を一堂に並べ、比較しながら、それらの可能性と限界を示した本書は、自らの研究がよって立つ術を選ぶうえで大いに役に立つと考えられる。

RTは、個々の発話事例について、会話参加者が個々に持ちうる認知環境や文脈想定に応じた解釈の道筋を提示する。またその道筋は全て関連性の原則と解釈に必要な推論過程で統一的に説明されている。さらに、発話解釈をめぐるRTの仮説は、言語心理学、子供の言語発達、臨床心理学などの実験的アプローチによって常に検証されている。語用論は、その成り立ちからして言語学、哲学、論理学、心理学、認知科学など学際的な特徴を持つ。RTは今なお多くの他の学問的分野、言語発達、進化、心理学、脳科学などの知見との整合性の検証も行いつつ、その理論の精緻化をめざし進化している理論である。言い換えれば、RTは実際起こっている個々の言語現象や言語事実を統一的に説明できるとともに、これから起こる同様の言語現象を予測する力を備え、また、実証研究により常に検証可能な知識体系としての認知科学理論なのである。その広く深い世界観を背景に持つ理論ゆえに、RTは決してわかりやすい理論ではない。使えるようになるまでにはかなりの時間と労力を要するかも知れない。しかし、労力に見合う効果があること、つまり大いなる関連性があることを筆者は本書を通じて伝達している。これから語用論の研究を目指す研究者たち、RTに興味を持っている人たちにとって必読の書であると確信する。

参考文献

- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell.
Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. (内田聖二他(訳) 2008. 『思考と発話—明示的伝達の語用論』東京：研究社.)
今井邦彦. 2001. 『語用論への招待』東京：大修館書店.
今井邦彦(編). 2009. 『最新語用論入門 12章』東京：大修館書店.
今井邦彦・西山佑司. 2012. 『言葉の意味とは何だろう』東京：岩波書店.
東森勲・吉村あき子. 2003. 『関連性理論の新展開：認知とコミュニケーション』東京：研究社.
Jary, M. 1998. "Relevance Theory and the Communication of Politeness." *Journal of Pragmatics* 30, 1-19.
松井智子. 2001. 「関連性理論から見たポライトネス—意図伝達性の問題について」『言語』, 30

(12). 52-59. 東京：大修館書店.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (内田聖二・中俊明・宗南先・田中圭子 (訳). 1993/1999. 『関連性理論—伝達と認知』東京：研究社.)

武内道子. 2015. 『手続き的意味論—談話連結語の意味論と語用論』東京：ひつじ書房.

内田聖二. 2011. 『語用論の射程』東京：研究社.

Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic form and Relevance." *Lingua* 90, 1-25.

Žegarac, V. 1998. "What is Phatic Communication?" In Rouchota, V. & Jucker, A. (eds.), *Current issues in Relevance Theory*, 327-361. Amsterdam: John Benjamins.